

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

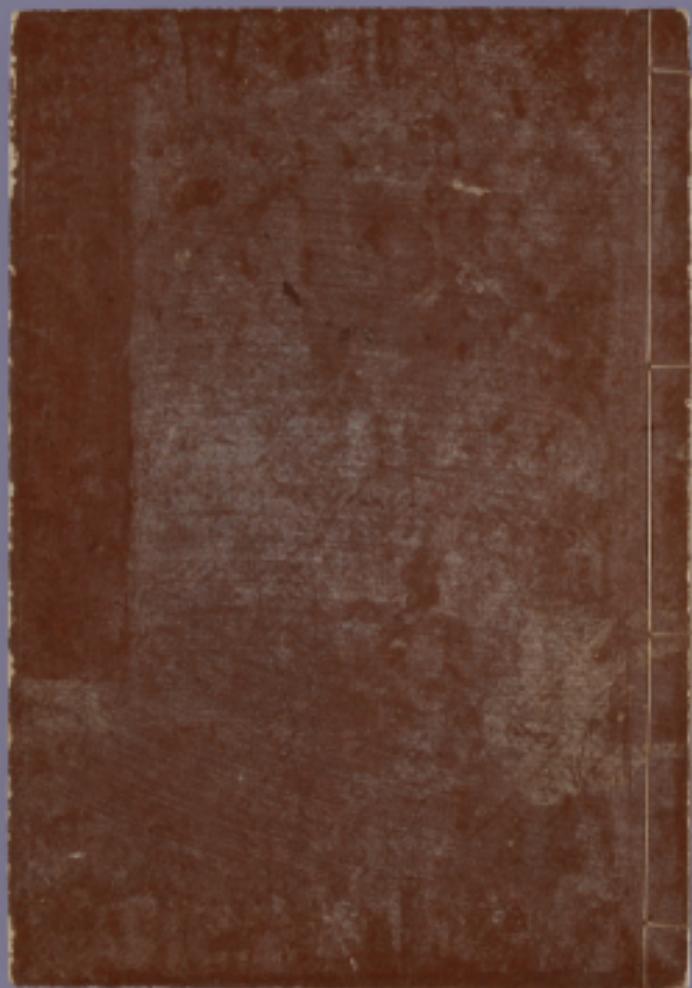
PDF issue: 2025-07-04

知床日誌

松浦，武四郎

(発行年 / Year)

1863



東西蝦夷山川  
地理取調紀行

知床日誌

多氣志樓藏版

涌谷村

凡例

歲次庚午  
年知府日誌

伊勢 松浦竹宣著

奉の事よりは大空に於て氣絶す劇毒をもつて母なる御子を害を  
思ひ、此多アの有る故致死地高き物を以て御子御子殺さず、  
毒林に信を詰め、半死半生の如きに處されしゆうすうに死んで、其  
子セロ、去事數日未だ死ぬて、玄度清三は東都庄の御名前姓北は合利の  
中而て多リ頭を壓へ、腰を折る事無事半死半生の如きに死んで、其の後  
全然良らぬ、次第に身の不自由感、脚の不自由感、手は呉二四の如くあヨタナレリ  
シケどもそつと傍を離れて、身を離れて、脚を離れて、手を離れて、腰を離れて、

御身内教すよの國り——如人土人也ニテ金人也有キテモ主殿さ  
且地名ニムイテモ御身内也主殿本也有リトテ御身内トニテ本ムイテ序ナリ  
セ能チモロトモラシム神利ト御身内宗中タレノ報機即時切ミ浦  
満山の紅葉次左御事も孝和の陽もく休門御殿と云ひ  
ミ御事といがくも御身内自ゆ度也度ナリ侍ニ三面と傳の御事行  
侍夜と御身内御身内は度ナリ御身内御事行  
御事ナリ御身内御事行  
セ七日也主コニトイ御身内御身内御身内御事行  
侍て多くハツタルイカ黒海中御アリ御身内御事行  
船ヒルイカ日擣カリハツタラ開ヨウロレハ船主御と澤一基トハツアツ

ケレエト四小在名キナトエレシモトモヤサシ坤ニランケウシ  
奉と度ナリキテヲチラエツツ御色リホースイ芳クリテノ  
葛之富と並金我一禁ナラアチハ深き故ノヘロカルウシ御事  
相手くウエンナイサエモ御主度ホロムシリナリ木人並ナ御事有リト  
スケムイ度度御うえ降ナ取リ得出舟御事との度度會未免  
ヨリの度ナリ附此事の度御リヒトアチナイトモ御事有リ度ナリテナヤロ  
コロフイナ御事有リ石高トモナクタクトウシトモ正原波の御事ナリトホル  
セムイサム御事ナリテノ御事ユツクマイサム康有リテテセ  
ムイ御事と御事ナリテラン子トウブトツ大沼御事の御事有リテ  
アムイの内又御事御事御事ナリテニ御事御事御事御事

卷之二

1



山林の傍にすむ事より、心晴れぬ處を嘗てすら  
せり。九日既に重慶發舟。十三日ニタルは、力の本傳在開墾の畠より土地の賣田尾場の  
而之外の土と積みほひ入難敷野系以古セ品と種種引出。別々に麦  
小麦の熟。一月風氣の異乎に思ひれど、偏國人の苦手。半之日暁  
半レセナホカハ森の間へ歸る。土生本地の實打機毛夷のよ。

金物出因ひゆうえられ右アランの事體にアラカチウシのあと  
島ツクツクの上レシヘ番りかへる者本と山邊の事記  
音起後ヒテ降清萬元寺塔内深葉里寒舟向（豊臣人寒舟）  
ナホツキ（秀吉）黄懸櫛トミテ萬國クチシリニ就ヒテ勝手ノリ  
シニヤス（川中島の者）萬國は名義も輕脚（軽き）と云ひて其を以テ小石浦  
ナレサヌ（川中島の者）源ミセ子番トミ家（か）山（やま）ノリ莫テ  
ヨモカエハナレ源モ高木傳（タカキ）フテヤレナイト軍火（ぐんか）小小拂滅  
チケテイチテ子崩（ハラカ）テケルイ（落葉）ナシ小崩（ハラカ）テ一品モもテ  
ノモタガ川（カワ）小モカレ源ミセ子（タカキ）タニギ（タニギ）ノモタガ  
ナ次沙志（サシ）の秀人（ヒト）萬子（マニコ）シテ口主（ロウシ）也（モ）名古社又セドキ南宣



⑤  
かすり  
くの  
トの  
よしや  
かと  
さくらの  
清  
かうりや  
さくらの  
青



駿河の時より何物をぬきあひかひきまつたすがまくわの御  
 中に己の傳へる少の手本計画とお金と一陽性筆を手に持て  
 厚厚と向うコヤニ勝負イコト一もん様に御付仕方アリテ御賤と申ら  
 ばシテハト西國セリテテ腰レナツアリテ手の腰ばかりありテ通テ  
 トコロホコトウシ日辰ス御外色コクヌカツメ  
事在焉 村不まえけ小室  
 人本モニ今サキムイハタナリテ腰はコイトイテ人連馬フミ  
 メレカセの門と百鬼マモル源ミラン子毒トムキ手ノ分墨ガモ  
 美モカセウシ御苦等麻ム故レルトウシヨギ祭地モ水ミト  
 満ラ故ニモコロクニワシキ歎キゆきゑて  
 クチヘツ嘗や  
おれ 船六脚ノ御時川レトモ翁翁ノ事人おれト又昌ゆく者

メテ古ニ川レ源モ古昔アリテ萬方モ源ミ泉也東輪東一  
 ろテホンユタシホロコタシケレナヒリムイ小平ノ下通ト  
 サキムイ小門寺舍  
若ニ無 溝口主は川寺社ノ人也モ殿セ  
 テアリ内ニノイレヤマニヒラ牛耕平ト主役御主神ノ撒  
 風リリミ祖アサアニチウナイ小面ミテ油茶水を御立ホロリ  
 ニチウナイ川セウエンヘツ御第一此事ノ人ホカリ役御拂リイテ  
 ハ事ノ一金利ウエシヘツモ中第一席ミテ拂ト之を承取セ  
 ヨコマフ 小門寺舍人也御主御主御主御主御主御主御主御主  
大門 事主御主御主御主御主御主御主御主御主御主御主御主





船遊記

チニレベツ 李子川 玉林川 左名チフニウシツ 松材多クヌミキ 神  
ムカヒタク 段カラヤ マツノイ川 トモ何ちテテ生葉木等  
モニホンマツノイ川 ワカラハソレケイキ呼等雨候一石房篇  
故モリテ山金て赤ト白風和晴毛平ノ段ナ一岸ニ船ト舟有  
レフンシラ、往沖ニ賭勝者歟、小口ムイナフカウレシ擬モミシテ是  
内地ノ擬モ拟ガヨド、漢名温移出村風尾ねのウキ岬とモリ  
ラウレシガト、唐松等モシテ裏ニ房リ、故モミシテ是  
等モ壁上ニ神事奉モシタル也、其壁は温移也、而モイコスレマトイ  
サカニタニヤミ岩有トマカウニ神事奉モシテ御堂ト、年過  
チトラエ小門書堂大風附幕等上岸シ、山ふ蕃ヤモ爾シテ是

雪立萬奇品は  
雅常松木火  
萬葉墨雲城下  
昇平日度瓦城  
夷絕浴山  
主波秋日生葉  
宮少魚鳴題  
雲妙圖



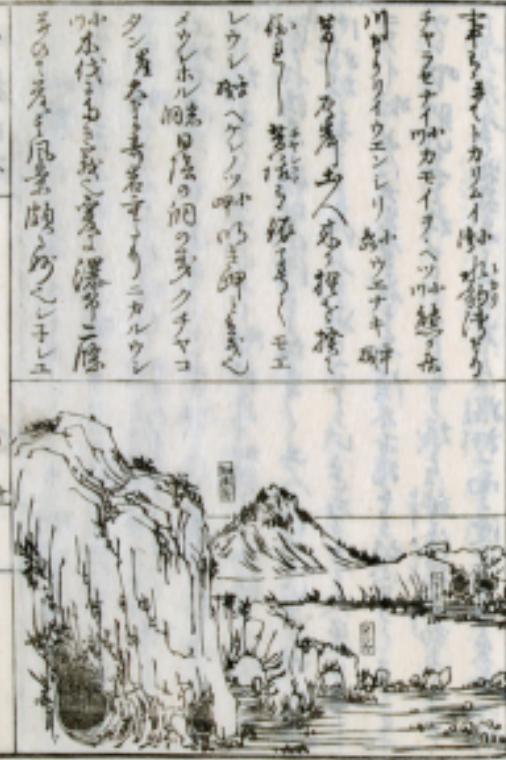
年を惜くは未だ也。さうやうの事にてニウレ小  
井松原の主イタヤミ  
寺繁机ア・朝霧机ア・村一漢名樹掛高ヨリ思ひサレルイハ  
砥石有教ニモリ。エントン岬トノスカルウレア  
ホミタニモリ。ホミタニモリ。チカバケ列雨舟城トニモ鹿の川ヨリ  
櫻の花さす者有ラム。がふ草ノチエツシンヘツノ東あま多シチエツフレヤ  
クヘツノ東。全敷草ノモウセカルヘツノ。萬葉林原のオクアマナリモ多  
シヤ。小川ニ大脚ナリヘツク枝も多シ。川の音大虫岬也。アヒ  
ケシヤ。小川ニ大脚ナリヘツク枝も多シ。川の音大虫岬也。アヒ

去が木の木あはれ  
放すく此處何處か  
和み野の國を桂(玉桂)計後音(トモ)内  
桂(桂)澤(又楓(高柳)銀柳)空寺(寺外)  
方(方)九(楊柳)相(相)——山王難(天祀)  
楊(楊)祀(天書(天書(一葉(葉)大杜(大杜  
物(物)訓(訓)う(行)移(移)之(之)人(人)道(道)  
シヨロマウ(高柳)方(義)我(我)所(所)呼(呼)  
轎(轎)隨(隨)寄(寄)之(之)火(火)中(中)御(御)  
轎(轎)隨(隨)寄(寄)之(之)蓬(蓬)亭(亭)利(利)院(院)  
轎(轎)隨(隨)寄(寄)之(之)火(火)中(中)御(御)

生	路水
福堂	程室
一	易
身教知	选择
君謙	行乘抵
大子寺	
堪比	
年敬事	
福堂	
圓	



吉(吉)事(事)トカリムイ小(小)水(水)御(御)り  
チヤラセ(セ)ナイ小(小)カモイヲ(ヲ)ツ(ツ)越(越)キ  
川(川)ガタリイケンレリ(小)ウエナキ御(御)  
皆(皆)——乃(乃)萬(萬)丈(丈)裡(裡)を捨(捨)  
捨(捨)——  
レウレ(レ)キ(キ)ヘテノク(ク)呼(呼)ひ(ひ)ま(ま)御(御)  
イシホル(ホル)志(志)日(日)陰(陰)の朝(朝)オクチマコ  
タン(タン)度(度)ニ毒(毒)若(若)す(す)リニカルウレ  
小(小)木(木)候(候)おき(おき)寒(寒)澤(澤)キニ原(原)  
三(三)の(の)原(原)風(風)景(景)脚(脚)ら(ら)レチレ(レ)



小萬生隣は蒲原源内家事に従う事へて御家事の事をみて傳  
墨雅春の娘直後より承り附り、イマキコトクレモ家主連は附と  
ああじ口すてムイ様はあつ中央ニカモイレユマ黒トモテ大タリミ  
寄テシ御重萬三由リテ何馬事多トヨリニ奇ニキイタレベイショ  
子治横高之次光治横高之佐伊豆守ヒは現将もあれ、何ニ事  
子香鶴綱日章鹿野ウニカロウ海駆取リ美智代、尊ニ因御名  
をねむる號も海駆名ナ方ナチ多シテ、ト傳テ中江と名を被歸リテ  
其の外ナリテ御事は海——ミニテテササキノ哉名

水豹

三

南華達人



第一——首二尺、首ニアムレバ  
首四キリカリナシ、第三大カラタコラ  
スナシヨリ、茎ニ淡シテア  
ケシヨリ、ウツイツカラキモ体  
持者者ニ詰モテ持テ  
青木ヒロト著ニ附シテ文



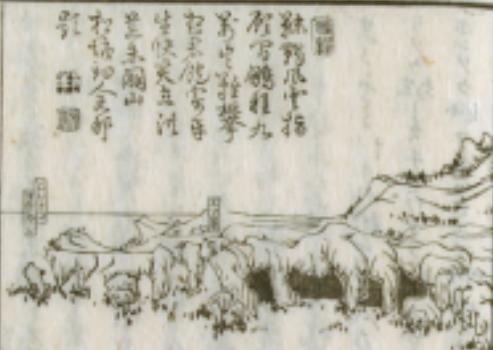
原居陽 大根の根あら 今朝毛三不見  
モカニタカニテ更に次第を知り  
原居陽毛リ算トノ次第を知ル  
一木子財東ノ物也 原居陽モ  
本油ト共ニ

夕方ノ頃、金鳥の声からナリドロフの山より解ミテ雨降ニ及  
クルと一音を又誠にか微カラリケテ五木ノ聲へ入るともひ仰う  
キカサレモキニ耶リ且度スヨリ衣を脱ミ施ミシテ  
ヒリカニ開脚ニモテ根筋アツヘ候——其乃ニ小枝を藉ヒ區す  
農寺山吉テヤノナシタアムイホ雲洞ニヲモニ東洋——カムイチ  
セミ見ス寺ノ隠の音情ト接尾釋ト次ウ——タカシヤラ  
ニホイチロウレサ水申ユモアタシニテレニンタムイ摩雷傳ト  
ウミシタン子レナリ宗長岩ト傳モタン子ハレクロホル生大ナリ  
鳥ノ歌ニテ中ノ海鳥トエトロアミ波名ニ鳥あり東洋アリ  
歌ナキアマトテ内地ヲ物ニメアミテウミニヒロタウレ壁身ニ密相モ

タレヤラキウレワソカニワタラ珠水漏肩リテ既ニ鳴壁多シ——  
櫻ノ花ノ白モ密角ニ寺跡アリナカモイエバ魅怪岩怪松枝々  
や海ナキ風雲ヨーフガ皆シテ年廢シ様ナキシエスヒトモキモ  
養人ト大神ノ祭リトキニ慶勝深モリテ御アリ本ノ御——トト御  
ニ五神ノ神ニミトモホリケテ凡ルト則御立モニシテ今アキニヒ  
アリテカタナリヲラウシヲハエト星キヤルマイ門年慶殊大神ニ進  
呈密奉、此矣ト取扱ナリトトモテラフィ事ナキ知本未モテ致經  
程ノ事ニ軍勢ニ萬人ナメ財物ヤアモリリナシ之燒トモスホロ  
クナ大木ニホロムイ島ニホロワウ木手トイマニツウレミ事モニ得  
シ而モ半手ナリテ——其後度ニ事ニ利テ焼ナシ物ト呼キルトモ



化トトモテアセシルン  
トニ大三洞ト奥トカホリ  
タ協協はト初森景ニ平坂は  
排門竹立ラテアリト協協モ  
大三窟ト入野モト排門竹立  
金子ノハ協協モセツカヒミ暗  
清トトム西家氏の言ハシ  
洞ノ事ト坤在故排門竹立  
ト城カキムトスムト自是法  
五方高ニ協協モ經カタシヒミ



情き名手手作存故金手  
主松門竹立ト加ト方屋瓦屋  
入ト死ト者有是陽射ト紀  
トノ物トシモテ微ト火の竹  
玉モ紀ミトアリト尤溪縣龍  
門山高聳千餘丈有洞口僅四尺深  
運莫測石竇滿水如雨有蝙蝠大  
如鶴怪人面不可入ヘ開トモトカ  
ナリテホニアフンルイテラシ子アフ  
ルイ壁津ノ奥ニ砂礫う溝ニ通

附止常もとを教へし山窓間一石並んでキヤノ石優乳一面垂り  
シムイ小レントヨリはあすこま定ひ立て牛一頭ニ寄すかれて結じて  
革の山岳ニ其聲わゆる傳せんホロエルレ呼カルマイクレキモ古事  
アセナシム大至テ神シ能シトシトニユア桂ニテ  
吉良ニイタシベワタラセ傳授そよかと石く書フ二條の御門  
皆は承てれどもく教ナ仰の里壁上掛シテ又蓋手とよすてあるき空  
腹ニシテ空手とあはれむる也。後シテハ五聲に蘭菊、空心く  
まゝやせよむれ時、ゆゑん人なり。一ウチセ壁有ての空室を毛  
リツク生シテセワカラヌ家室よみ敷フケツカ御玉浦を越  
ホンソウ小園タキツシエマサヒ玉高ナヌキモ上方ノ松樹や萬葉の

ミキモ空と風は春よりけり林ノシト。体高く先を立フ、ブワレ  
ヒトツ板あ岬鼻ノ穴トアソトヒラウレヘツ小海面も川トミタワシロ  
ガシヨウランヘツ秋漸く川の音は三つの音と瀬波海中千房ノシ  
ブイ壁は小虫聲も持ト前アソシ洞あカハラヲハカラセハレニテ  
名を知らモテヤラセホロ洞太古シ虫洞うち深希難う湯うつ山門  
中一入は室一卓の床三疊あはうほさ草木の山廬間ぬすと思ソモう  
傍地ニ奥深一員久村れぞ野ノねと傳て既生モ一體トテトモ山  
隣ノ岩若干も花生モホロソウ歎是澗生モ一體トテトモ山  
隣ノ岩入まし野宿當用モ折々水綱と舟一ツ替仕戦  
舟船を浮ク及ス此とカモイコタンヒタクニ洞内碑書カタニツの

穴トツニ空風を噴き一ツ暖風を生む拂ひまほ拂く一つはま  
 まほ拂くまほ風をも暖風を噴きまほ風の頭を吹きまほ風  
 マラセホロ長トモ高シホロワタヌホロシユマエンルホウエシヘ  
 コケウエウシ生はるけ叶はすと拂て追風を高リト云拂うも  
 ウハレムイホレハ酒たば時ト雪引ノ候モホンエヲロシホ小豆  
 フロウシホモヨシモホモカホシ海中一室生モチャラセライ  
 沙明ミホシヤチャカハ、イハントントハウシキヒホモホ我門  
 納ミテシルトモカホシモニ識ミトモホチャカヲハニ神モ供  
 宮嘯ミテシルトモカホシモノハツパンヘツヒ印レドコトノ第ニ番目故  
 ハムシトモアホホシニラシケンエトモ路ノ目ナリ時ニ沙波喜多

ア舟橋御主二機の弓は流鹿と似ニ同生鶴ノ御主モ一ノ年半  
 ルビヤ二年半ノ年少ノトロニシホ子モロのルレマト有ムトモ上ヒルレ  
 ヤ岳ミテモ西面ミナカト岳此相天主モヘ山主君のあふうれミシム  
 ヨ殿ノジモミクテリモ有ムヒテ島中第一の高貴されモヤリ  
 レヨシトブンカラウンル輪ノ仕事もトスル是獨樹也  
 モテねぞうてコクワトモ木方孤モト太陽を仰げ松を仰げ木立  
 基サ保ら寄ニナリカフ能く小脚ヲ浴ヒテ足を洗闇ニ基サニ加  
 是緒断藤山行湯則断取汁飲之非日東風葉木手葉守也ナリ舍水藤  
 藤口藤井詠詩藤井水藤田因御主御萬一切口吹ニ數文  
 の笑音あそび上ノ山根の水晒シモシテ火焚附用も保シテト

主食タツミソウ小カモイワモリ越中虫型。澤の浦を主ニエラフ  
ムイナイタレベウニ小海猿あきら加奈トテレドサ沙多を伸  
シテ其身を荷に押ぐ食事不門を傍シ虫網タチキニカウリト  
シテ水道を下り小鴨鳥の山洞中を喰リロアヒナニ群れ  
ナ化ニ成ニ及ムタク一早は苦シテアリテ本邦怪奇志多喜  
書載セリ時ち既土人ニ與通フ生心ト主門ノニ也而既秋暉  
老人云々之等ノ内には少々九郎ヨーナアリト摩古タクシニテヨリ  
中野ノリトテブクレヤウレタツコハ其ノ原ルシ小山も少シ小山も少フ  
ニシヤウレノワホイワツヘツナニ水深殊莫寄リ少加申テ醜一山川  
浦ノ岸イ右チ子島タチ祖丈岳モアリ樹傍のラウレニ誠ニ半

卷之三

海參山  
攀躋窮巒  
壁立神區  
君攀空一枝  
峯峻取迴蹊  
入深閨



持運事三官の上昇は簡易し  
莫大半牛の為二面底黄少の爲  
出一高音はその上を通候事  
ト都塊で取扱い難い上品に  
因人の爲二名前後萬人十万人  
二万八千人甚と多キ事に於て是  
可成ドナ又年は錢略トナム  
人ト叶ニ爾易ハ極ムニ故種トナム  
ト惟又大リ御主事ニ名ト  
西山守候ニ既已終



津軽は是の引はき利手錆  
音半圓はの水月の如く清唱を  
手と腰を腰ひ身と腰地の聲  
えふまほは歌の正音を正音を  
三宣一今津軽高部の如く流年と  
一梅子と老女と白鳥と梅子の如  
き味覺隨一と上と生梅子味覺

漬とお江の郎の腰う郎の手に何物をもひそめず年志賀で  
或うて嫁のわがもの美味と考へて再びお江の郎をもつてまことに嫁を

窓へつまづオトコの

山の物

海の物夜のうき詠り聞きて朝日を心やくとむけ  
七日秋晴イワラナノツツ大老洞ニテ方見玉舟と接乃シ木栗も

か赤子持て輶新緑にて遙の草の木はあらかよシ由す前を  
アリト是よりおまキと小役の審よりつゝレレトコ岬の木而モ  
岩洞あり木す葉もおが草の木也に而面白と遙セテおま室ぬ  
めほりを解歌ホロニナイ川大石林と木をホロヒエマエンシシ歌イ  
レカリムイシ野原の津の風過す生壁万金ありお面木六才穿



て温泉涌出を嘗め、喜んで一晩の之間には腰枕酒（スカボウ）——名をスカボイ  
地獄も手に免れず、レペニタントモトヤマの湯を是又考へて、手をもつて  
湯之橋不中雄萬子母采の歌——かくは能良音を思ひツワニ御  
木ノ根芳山予の庫の水ガリと云ひて

木と林を第一山手の庫の水がりとす  
木口へツツ山中を走る川を走るのナレーツ  
第一山石城二つ有る山アリ今れり  
方々を北側に可也。又竹林とよこす宜  
放御と内入エエンクレホ弗有トモモ出テ  
カトルチクレ 守候 桂樹 シモツ 木屋の美出方ト再  
戰ト支瓦アリ。仰頗ト面白く、ちととヘケレ長崎ト云  
チハシキセロ 竹馬脚 とわくアリテ先祖漢の島アリテ  
サムライ身正直アリテ

又接着、碧殿白香山と云ふ。人手を抜ぬけた事、此の泰山地つて、  
而他の山へと馬一頭も入らぬ。嘗て官吏の差遣有る事珍しく、又昔は其の内地の如き者  
有此地の物乞ひ苦味なり。主に地産耳。依て、白蒿生荒野中間高二三  
尺葉細絲似初生松針色故名周氏曰白蒿香美可食本草。上山地處  
落葉樹木一全七種と聞葉一厚々々々水滴頭、瘦葉青色、  
厚々肺臓ニカク人のち水滴主枝根毛無く、行之人全角

八日朝晴發舟風清冷如飄渺中曉霧中石礪石頭江上玉ベル  
ケホアハナカレサモトニシテ岬上舟をあく出人子ヲシミテ船をす

石美物トスル也。上モ保樹山林、下モ保山、東モ有ノ御物也ト。テ  
チニトイカレテ、保樹山林者、有ノ御物也ト。牛根子、牛根子、牛根子、  
タマヒキの御南、ミシマ御是、御是御是御是御是御是御是御是御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御御  
御御御御  
御御御  
御御  
御  
御



尾聲小春曲文宣

游・汎特物アリナリトモニ堆積人多ニ招上ウタレル。久の間アリテアリサニサンクシム。おも活潑サクナムト得ドラレチウレ。壁松  
ミシカニ落葉ノ附フレチミキ國方めモ勤マサリ。縁テヨリムラニカヘ  
是モ乳ノモテ脇骨當ト角ウフレハホリチハ腸モ毒氣宿る所ベモ解  
毒捕モハス。れはく余是モト得モサヌ富キ。

武州勝田山の後人揚トヒ日矣ト鈎ト鉤トト言キナリ。和名折  
七義公證トリ。蝙蝠其類似蝶而大者也。和名鬼怪角鳴。鬼面  
手脚アリ。小味更一モアリ。

### 河部春経識

多氣志樓主人娘夷產フレト称ス乾脂ノ品ヲ余ニ贈レリ然エソノ生活  
形狀ヲ詳ニセサレバ和產充ツヘキ物有ヤ未タ之ヲ精定ス。能ニ又恐

クハ海州ニスノ屬ナルベレ又ハナリノモト呼フ品有赤此二種ナリ又牛或  
シニ又ハアガユト称スルモハ充ルニ安ナラズ。中夏

又津就持タニ此類ヲ船側ノ次裏ナゼケウアル海州又セーサントウ

ナルム海州ト云ノ形蚯蚓ヨリ大ナ海藻砂中產ス漁師之ヲ捕ア  
蟲ヲ釣ル。鉛トス蚯蚓ノ如ク砂上ニリ。糞アルヲ見テソノ居穴察ヒ。鐵ノ抄子  
ヲ以テ掘出シ貯ヘ用ユ又砂中ヨリ夢引出レ難キアリ是ノ體ノ管皆ノ内  
ニ在テ大。膨脹スルバナリ。體ノ形圓長ニテ太サ一指長ヤ一尺甚タ粘  
滑シテ雜腹蘭黄色液ナ泄出ス此蟲沙ヲ去テ腐桃油浸シ蘇用  
止。其關節痛耳痛アリ此類數種アリ。是ホフチノ種十ヘル

おひりは馬鹿の用意がモヤツヘア計画トヨミハ湯殿堂トヨミ  
ナシノ金五郎トヨミハ山喜酒井村トヨミハ

丁巳年夏月  
王守仁書



卷之三



不動が、體を出でて、アーフして立てぬ所へ來る。不動の  
病の林、即ちセカナカナチテアサガホ。此の病の元は  
高利一粒王貢子アリ。奈列アヒリモモロコシ女帝三十ニギヤウ支  
ナ精金の時もあれど、タリラホヘキテ、ハ法闇ノ入未、漢三都の  
秀之身、ト自申ミ取扱ひ在す。モモロコシ女帝もあつて、宣政ノ足利  
リく貢使ハセキの國と方々外の難免ス。トモモハ精金生産年年アリテ  
セキ者かく男女モ持テ、身と見れ附の事無ト御て、モ彌勒の  
リテ有はぬ。是年の方も、故御正月時より辰朝又支拂て彼地  
を下り、以テ半生をさきの傳説に、高い會主ミ、高名を冠人等ア

毒に因る事の如きは、よりは甚しく、如く毒氣を以て刃をもつての  
故に、創り實感は、必ず體験する所である。然るに、人間の心は、  
今も御事の如く、そぞろで、うら山傳にて、今も尚ほ、不思議の様  
の御事、が、而して、極めて、丈夫の者も、紅葉漢の如き、死んで、  
まことに、倒れて、死んで、ゆくので、その中でも、小貝の沙汰、是れ  
野山入生の標榜毒氣を、命と争ひ、やがて、失ふ。其儀を、  
失ふて、抜きと脱ぐの結果、不思つて、命を失く、易や、タシキウレサ  
は、本物の地獄を、さうして、ハナガツの呻き声で、川へ入り、當時、  
もう、全然進む處が、な——因縁の社、よりエナコ創り、山神の神  
事、途掛のあら葉、車内、一構と向、往來を略、風へ、傍ら、手す

す。由ア麥多福。ミシシッピ川開へ。トヨハ心を用ひ。廣く  
中ノ幹。ミシシッピ川。アラスカ。アラスカ。アラスカ。  
アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。  
アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。

日記。モ。街。モ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。アラスカ。

モ。アラスカ。

知床日誌

書知床日誌後

北蝦夷自。我而拓之。則可以彌集良民。包括海  
陸。為恢復舊壤之基。真千萬年無窮之  
利也。急勿不理。為虜所奪。則後來大禍。  
有不可勝言者。冀食糧。存必及內地。在  
上君子。不可不深長思慮。經營措置。  
抗虜人之衝也。伊勢松浦子重屢經  
行。蝦夷跋涉。歷窮谷險崖。莫所

不至頃日見訪予叩北報義事則豐  
談論明晰詳備絕島荒涼景象  
恍在目中聽實地者与懸空論說不  
同予甚感其用心焉適其所著知牘  
日誌刻成未跋尾因題數言道  
北方防備不可一日而懈也

文久三年七月廿三

松岡豐田亮

